

## 和歌：文苑

著者	?本, 植, 宇野, 哲人, 中内, 義一, 本田, 弘, 石橋, 愛太郎, 楔川, 是空, ?葉, 瓢々, 蝶二, 哲人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 3
ページ	4 5 - 4 8
発行年	1897-02-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4754">http://hdl.handle.net/2298/4754</a>

天の少女のつたへたる  
いともゆかしき曲なれば  
御代のためしに千早振

あはれつゝとうたひ出て  
千代の緑と残しなむ

勅題

松影映水

黒本植

松影をうつして君を仰くかなみめくみ深き池のすゝりに

全

宇野哲人

君か代の清きを水のこゝろにて影をうつせる千代の松か枝

全

中内義一

さかえ行く御代のすかたを志賀の海の浪にうつせる唐崎の松

全

本田弘

幾ちとせ縁入しき松かけをうつしてゑるき五十鈴川浪

全

石橋愛太郎

さゝなみも治る御代の松か枝は影ものどかに澄そわたれる

硯友會和歌(久保千尋大人選)

題えらぶ

川

さよふけてわたり静かになりぬれはいよゝ淋しき石川の音

友人に送る寫眞の裏に  
相見ては互にこゝろなくさめんへたてぬとても捨てなたまひそ

折にふれたる

是

空

常盤なる松のみさをもくもりけり市のちまたの塵にうもれて

庭前雪

ときならぬ花のふよきと思ひしはふく風にちる庭のわたゆき

夜寒

夜あらしの窓ふく音に夢さめて冬のまどねのさむさます哉

怨人

たへかたく思ふ心にひきかへてまれにも來ぬは人の玉つさ

そゝろありきしてどある寒村に到りしに

小學校にてわらへの學ぶを見て

青

葉

思ひきや筑紫のはてに大君のあつき惠の露を見んとは

閑居月

瓢

々

むしの音を友とはかりに端居して更ゆくそらの月を見るかな

海邊月

名にめてゝ打ち出て見れば白波にひかりくまなき住吉の月  
海原やなみまさやけき月かけに沖ゆくふねの敷みえにけり

雁

稻妻

もの思ふ夕の空に聲を帆とかけてそわたる秋のかりかね

秋の夜のまはしほのめく稲妻に見えぬ雲間もあらはるゝ哉

折にふれたる

蝶

かたわらかわらのむしろをまきたへの枕にかゝる小夜しくれ哉

焼くまはのからくもねふる乞巧等かこも吹きかへす冬の夜嵐

はらとりかかどふきありく笛の音に犬はえかゝる冬のさよなか

氷る夜のちまたをめぐるはらとりのあと吠えたつる犬の聲かな

舊都雪

さゝなみや志賀のみやこはあれはてゝ雪ふるさとしなりけるかな

朝雪

親友會員 哲

朝はらけ吹いるゝ風は寒けれと窓もとさゝす雪をこそ見れ

樵路月

柴人か歸る山路を木の間より心はそくもてらす月かな

月前霜

有明の月の光のてりそひていよゝく白く冴ゆる霜かな

有明月

たちまよふ雲のたえまにはのくとえらみて見ゆる有明の月

俳句

澄む月に投影法をまなびけり

朝日影松の枝こしに嶺の雪

滄海に春さめはれて嶋近し

さらくと時雨まぢりに落葉する

月の干瀉聲遠かりゆく群千鳥

冬枯や梢にかきの二つ三つ

月冴えて淋しき道や石地藏

正月や近縣旅行の文を讀む

歌馬の嘶もやんで元日羽子の音

垣越しの梅に酒酌む男かな

花の枝に鶯とまがふ雀かな

元日は皆新しきこゝろかな

若水にくみこむ星のひかりかな

初日さす松から雪のまづくろかな

寒月や氷打ちわる杓の音

是

梓

水

川空

松

露

枯

骨

錦

浦

戀

二

戀

花